

## 国語外国語化論の再考

森有礼の「国語英語化論」と志賀直哉の「国語フランス語化論」について

山井 徳行

### Sur les propositions du remplacement du japonais par une langue étrangère III

Celle de M.Arinatori MORI et celle de M.Naoya SHIGA

Noriyuki YAMAI

(本稿は、「名古屋女子大学 紀要 第51号 人文社会編 平成17年3月」に発表した『国語外国語化論の再考』の続編である)

### 第七章 言語とアイデンティティ

日本人が日本人として生きてきたこと、そして、その日本人が、いろいろ変化したとはいえ日本語を使ってきたし今も使っていることは、確かなことだろう。森有礼の時代と志賀直哉の時代では、その日本語にかなりの大きな変化があった。そして、21世紀の初めに通用している日本語もまた戦後の国語改革によって大きく変わって現在の形になっている。

この論文で扱うのは主に、森有礼以降の日本語であるが、当然それ以前にも日本語は存在していた。その日本語は日本人を規定し、また日本人は日本語を少しずつとはいえ変えてきた。そして、日本人の生き方・生活様式の全体を文化と呼ぶならば、その文化は日本語によって営まれてきたし、日本語で書かれた書物に保存されてきた。大筋ではこのように纏めて異論は無いと思う。森のような留学生のように外国語で生活し、本を書いた人間もいよう。しかし、それはあくまで例外的である。

このように、日本人とその文化、そして日本語とは密接な関係があることは一般論としては誰もが認めることだろう。この関係は切り離せないと言うのが普通である。それどころか、日本人と日本文化と日本語は渾然と一体をなしていると主張する者もいるだろう。抽象論のレベルでは、これを引き離すことは困難だ。しかし、具体的な日本人に目を向けるとき、海外に移住し外国人になった日本人もいるし、そこまでしなくても生活の場を海外に求め、日本語以外の言語で生きている人間も現在は多い。

特に現代のように、人間の国際的移動がかってないほど盛んになってみると、日本人・日本文化・日本語という三つの概念的要素が、空間的・時間的に同時に存在しない場合も多くなってきた。様々な事情で世界各国で生活し活躍している日本人は、異文化の中で日本語以外の言語を使っているだろう。日本人であることと日本語の関係は、このような現代的な状況の中で、あるいはこのようなボーダーレス時代の中で、どうなっていくのか。その関係は一般に認められているように、運命のように人間の意志ではどうにもできないものなのか、それとも森や志賀が提案したように、英語やフランス語によって置き換えることが可能なのか。

この問いに答えるには、言語とアイデンティティの関係をしっかりと把握する必要があり、

今までの国語外国語化論の検討でみたように、この関係が結局は核になることが分かった。さらに、一般論としての二つの概念の関係が理解できても解決にはならない。

その一般論から、日本語と日本人の関係が明確になったとしても、日本語を英語かフランス語に変えたとき、日本人はどうなるかという問題に答えなければならないからだ。

日本人は日本人でなくなるのか。それは、国籍というような行政的な意味でなく、心の問題、すなわちアイデンティティの問題としてだ。森や志賀が考えたように、英語かフランス語を母語にして、日本の古典をそれらの言語に翻訳して心の糧とし、またそれらの言語に蓄積された古典をも養分として育つとき、日本人はどうなっているだろうか。日本人の心を持ち続けているだろうか。

アメリカ人・イギリス人等の英語国民、またはフランス人・ベルギー人・スイス人等の仏語国民と、言語は共有しながらも彼等とは違った独自の文化を発展させて行くだろうか。そのような日本人はより幸福だろうか。

問いはいろいろ出てくる。それもあまりに壮大な規模をもった問いである。

世界には多くの言語がある。それは、風土と歴史に育まれたものだ。人間の集団が社会を形作り共同して何世代にもわたって継承してきたものだ。そのような集団を民族といえば、民族は、その日々の生活を通してまたは他の民族との直接的あるいは間接的接触を通してその言語を豊かにして変化させてきた。どの言語もそのような結果として、今のような形を取っている。文字を作り上げそれを記録した言語は、そのことによってそれ自体をより確かなものにしたと考えていいだろう。印刷術の進歩により、大量の本が生まれ、現代のように膨大な活字媒体が発展した。言語の記録が残ることにより、言語自体が堅固なものになってゆく。

この傾向はますます強まるだろう。テープレコーダーの発明やその延長上の視聴覚媒体の発明により、音声も記録されるようになった。そのように、言語は、民族によって共有されている点だけではなく、同じ民族の祖先とも共有されているという点で掛け替えのないものだ。死者は新しい言語を学ぶことはできないが、我々が耳を傾ければ我々に語りかけてくる。このように歴史を考えると、言語は民族のアイデンティティと切り離せないものなのだ。

日本人も、日本民族として日本語とともに歩んできた。日本民族の歴史は日本語を媒介として生き返るといえよう。その歴史は民族の経験として掛け替えのないものであれば、日本語を捨てるのは、その経験を全部でなくとも一部捨て去ることになるだろう。日本の古典が採用語に翻訳されるとしても、古典と認められないものは翻訳されないだろうし、現存する多くの資料がやはりそのまま顧みられないということになるだろうし、その中に将来、重要になるかもしれない体験が書かれているかもしれないのだ。

世界的な観点から見れば、一つの言語とは文化的な財産である。そこには人間の多様な可能性の一つの表現がある。この観点を是認すると、各民族はその言語を守る義務が人類に対してあることになる。特に、日本語のように、世界の最先端の学問の教育言語としても有効なまでに成長した言語は維持される価値がある。森有礼や志賀直哉によって代表される知識人によって嫌われた日本語、その表現法全体を含んだ我々の母語のなかに、他の言語にはない魅力的な表現・洞察があるだろうし、また現在意識されなくとも、将来、発見される有益な言語的特質もあるだろう。日本語的創造があることは、俳句・短歌という形式で毎日多くの詩的感興が捉えられていることでも明らかだ。

最後に、この問題に関して不可知論的な観点を導入すべきだと主張したい。我々の知識は科学の発展により、歴史の積み重ねの記録により膨大になった。しかし、母語とアイデンティティ

の関係について、我々が想像することも出来ない知識が隠れている可能性がある。

日本民族とは現在生きている人間だけでなく祖先の生き方をも包含するという歴史認識と、人類という観点からみると日本語・日本文化とはその多様性の一つの表現として尊重されるべきだという考え方と、日本語と日本人性の密接なつながりに関してまだまだ未知の部分があるという謙虚な立場から、国語外国語化論を否定することが出来る。

しかしながら、日本民族が自ら日本語を捨て、フランス語か英語を国語として採用し、その採用言語を日本化して、新しい日本民族に生まれ変わっていくという仮説は、仮説としては一つの面白さがある。この仮説をもう少し発展させて考えてみよう。そこには提出された問いを深化させる契機があるかもしれないからだ。

ここで問題となっているアンデンティティとは文化的なものであるから、日本語を他の言語に換えるとき、日本文化にいかに関与するかを考えてみる。

文化を関係という概念で考えるとき、人間は社会的な動物であり自分を取り巻く人間の中でしか十全に生きられないので、同胞との関係、すなわち人間関係がその生存や生き方において抜き差しならないものとして認識されねばならない。

人間はまた肉体を持った存在であり、生存するために、基本的な欲求を満たすために、自然に働きかけて必要な物を手に入れる必要がある。現在のように社会的分業が進み社会が高度に組織化されても、肉体的な欲求を満たすために周囲に働きかける必要があることは間違いない。ただ現在の日本はもはや、人口の大半が第一次産業に属して、食物を直接、自然から手に入れていた時代ではない。自然と関わりを持つことは確かだが、人間の衣食住の基本的欲求を満たすために直接、自然と関係を持つよりも、周囲の人間や人間組織を介して間接的に自然と関係を持ちながら、日々の生活をしている。

このように人間は、家族や世間の中で生活しているが、そのような第一次集団はより匿名性を帯びた社会集団の中に存在して、そこを通して自己の基本的な欲求を満足させ、心理的・精神的欲求を満足させてよりよく生きるべく生活している。文化とは、人間のこの関係全体を示している。日本文化はその関係において他の文化と相違する点や共通する点を持っている。

分かりやすい卑近な例を挙げれば、食生活である。食欲という基本的な欲求を満たすために、食べるという行為を人間は行うわけであるが、日本人の多くは米や魚を食べる。最近、肉も食べるようになったが、その食べ方、すなわち料理法は、欧米人もまた他のアジア人も好みという点で違う。刺身や寿司という日本の特徴がでる料理は、煮たり炒めたりする他の文化の料理法とは違う。米を好んで食べる日本人は同じように米を好むタイ人とはその米の種類や料理法がやはり違う。国際交流の催し物があると決まって各国の料理が紹介されるが、食べ物という自然の産物と人間の関係、すなわち文化が微妙に違うことが分かりやすい分野であるからだろう。それはまた他の文化の生活の知恵に感心する機会でもある。

上の例で文化の具体的なイメージが分かると思うが、便宜的に人間と物との関係に限定して、その日本人的な関係の総体を日本文化と理解するとき、日本語を他の言語に置き換えたとき、その関係は変化するであろうか。それは大胆な問題設定であることを認めながら、論を進めていきたい。

日本人の衣食住に代表される物との関係が、母語の代置によって大きく変わるとは考えにくい。日本語が英語になろうがフランス語になろうが、多くの日本人は刺身や寿司を好むのではない。醤油や味噌への嗜好が言語によって影響されるとは考えにくい。外国語を母語にした途端に、日本酒が味を変えることはない。逆に、この分野では日本人の文化が言語表現を変え

ていく、あるいは豊かにしていくと考えるほうが妥当だろう。外国語で表現できない日本の文化をその言語でどうしても表現しようとすれば既存の言葉にその意味を持たせるか、あるいは新しい言葉を作り出すより他に道はない。

外国に移住するようになって食べ物や衣服の嗜好が変わったという人は多い。しかし、それは自分の文化では容易に手に入ったものが外国に住むことによって稀少品になってしまったという理由があるのであり、同じ国に住み続ければそのような不便はない。このように考えれば、物質的な面においては、国語を外国語にしたとしても大きな変化を被らないと考えてよいのではないか。むしろその言葉において新しい語彙や表現が増えることによりこの変化は乗り越えられるだろう。すなわち、日本文化がその言語を変容させ、日本化して豊かにする。ここまでは志賀直哉の主張は正しいと思う。

さて、人間関係という文化においてはどうか。現代日本のような高度産業社会では人間関係は生活を大きく規定する。人間が自然から遠ざかった分、他の人間との関係を通して基本的な欲求を満たす手段を得ている。労働して賃金を貰い買い物をして生活していくということは、それを端的に表現していることなのだ。ただ、その労働そのものが、第三次産業の就業人口の増加に典型的にみられるように、人間関係の上に成立している場合が多い。

この人間関係において、国語外国語化の影響はどうか。

これは大きいと思う。人間関係の基本は自分と他者との関係である。まず、自分と相手、一人称と二人称という文法概念で規定される関係だ。英語ではこれはIとyou、フランス語ではjeとtuかvousであり、注意したいのは、この関係は相互に入れ替えの有効な、少なくとも言語上は平等な関係であることだ。日本語では、この関係の表現は、鈴木孝夫が『ことばと文化』(岩波新書)で指摘しているように、一人称・二人称というカテゴリーにはとても収まらない。鈴木は自称詞・他称詞というカテゴリーを設け、その関係依存性を見事に描き出している。

茶髪にした若い夫婦でもお互いをパパ・ママと呼んでいるし、状況によっては若い夫は自分をオレといい、自分の妻をオマエと言うだろうし、同じ状況で若い妻は自分のことをワタシといい、自分の夫のことをアナタと言うだろう。この詳細は鈴木孝夫の本に譲ることにして、ここで強調したいのは、日本語の場合、基本的な関係を意味する対人関係において自分や相手を指す言葉が多様であり、社会的な関係や状況に強く依存している点である。

このような自称詞と他称詞の多様性は、日本人の人間関係の捉え方の複雑性を表している。複雑性は利点と欠点とを合わせ持っている。利点は、関係する、あるいは所属する集団・団体の人間関係はその言葉が反映して強めるように働くことであり、欠点は、そのように集団での役割を通して人間関係を結ぶので役割に規制されることと、所属集団の外で普通の人間関係が持ちにくいことであろう。

このような日本語の世界を英語やフランス語の世界に変えたら、すなわち、自称詞・他称詞から一人称・二人称へと変えたら、日本人の人間関係はどうなるだろうか。これは必ず大きな影響を受けるだろうと思われる。何故ならば、物との関係と違って、人間との関係は、物の物理的性質や個人の物に対する嗜好や関心が入り込む余地が無く、たとえ社会集団の規制を受けるとしても物理的に規定されないので、そのぶん言語によって規定される度合いが強いからである。

大きな意味で文化は人間関係の特有な状態の上に成り立っているのだから、ここに大きな文化的変容が生じることは確かだ。日本的な関係が変容し、新しい関係が生じるか、それとも英語を母語とするイギリスやアメリカ的な関係、あるいはフランス的な関係に吸収されるのか、

予見することは難しい。これは一つの壮大な実験なのだから。しかし、繰り返しになるが、大きな変容が起こることは確かだ。ここに、文化的なアイデンティティの変容の可能性が浮かび上がってくる。日本人は、国語を外国語化することによって、人間関係という文化の基本的なところで変容せざるを得ない。

次に問題になることは、このアイデンティティの変化が望ましいかどうか、ということである。どのような変化なのか分からないときに、それが望ましいかどうかという問いには答えられない。そこで、無謀な企てかもしれないと覚悟しながら、その変容を予見してみたい。

日本語では自己規定が、自分が関係するあるいは所属する集団によって大きく規定されていることを指摘した。それが自称詞や他称詞に明確に表れている。しかし、英語やフランス語ではそのような集団による自己規定が言語的にあまり表れないので、集団による規制が意識される度合いが少なくなり、その結果として、自己規定が曖昧になる。その自己規定の曖昧さは、人間が自己規定なしで十全に生きることが出来ないの、かならず自分は何者なのかという問いを生み出さざるを得ない。すべての人間に言語が哲学的な問い掛けをするわけだが、またその言語は答えを用意している。それは、英語ではmeであり、フランス語ではmoiである。この自己規定も他者の存在を前提としている。meが想定する他者はyouであり、その集合体としてのthemであり、自分を含めればusである。usは当然、社会を意味する。ここで個人と社会の図式が出てくるが、これが英語式自己規定である。moiが想定する他者はtoiかvousであり、他者の集合体はeuxであり、自分を含めればnousとなり、すなわち社会である。同じ図式が出てくるが、これがフランス語式自己規定であり、英語式と変わらない。

この自己規定は日本語式のものよりも単純で、人間関係の多様性を脆弱化させるが、一方で所属集団や関係する集団以外の人間との間に顕在化しやすい関係を作り上げる。すなわち見知らぬ人間との間に社会を構成する一員としての対等な関係を作り上げる。その関係に特殊性を付け加えるのは人間の身体であり、その身体に関連する生物学的あるいは社会的意味付けであり、それが男女関係や友人関係といった一般的な社会関係を予測させる。しかし、そのような様々な社会関係も常に、単純なIとyouか、jeとtuまたはvousの個人対個人の関係に還元される可能性を持っている。そのとき、自己規定の問いが深められる可能性がある。ただ、人間は意外なほど思考を嫌うので、哲学的な思索が問いつめられることは稀である。しかし、個人と個人が裸のまま向き合うことは言語的には多いといえよう。そのような苦痛な状況を救うのは生活習慣であり、仕事を中心とした社会活動である。その点は、日本語の場合と変わらない。

日本語式自己規定が、家族や親戚、密接な地域社会の中の人間、すなわち名前を持った人間とその所属集団との間で主になされるのに対して、英語やフランス語式自己規定は匿名の人間同士の間でなされる。名前を持った人間を意味する適切な言葉がないので、匿名の人間のことを名無しの権兵衛というところから「名有りの権兵衛」と呼ぶと、日本式自己規定は「名有りの権兵衛」と世間との間で行われ、英語・フランス語式自己規定は個人と社会の間で行われると言えよう。

以上のように国語外国語化の折の日本のアイデンティティの変容を見るとき、その変容は望ましいものだろうか。

日本の社会は高度産業社会から情報社会へと急速に変化し、都市化が進んだ結果、家族や親戚、密接な地域社会がその緊密度を失い、匿名空間の中で希薄になった人間関係の中で生活しているというのが実態であろう。すなわち、世間というものが弱まり、社会というものの存在が強くなっていると言い換えられよう。そうなれば、いままでのような「名有りの権兵衛」と

世間の上に成り立つ自己規定よりも、個人と社会の上に成り立つ自己規定のほうが社会の実態に合っているとさえよ。そうなると国語外国語化による日本人のアイデンティティの変容は望ましいとなる。期せずして、志賀直哉の日本語廃止論は的を射ていたことになる。

それでは、国語外国語化論に賛成するのかということ、結論を出すにはまだ早すぎる。何故なら、文化的遺産と歴史を考慮に入れずに、民族のアイデンティティは語れないからだ。

国語外国語化論の前提として、志賀直哉が考えたように、日本の古典をその言語に翻訳して保存・継承して行くことを挙げた。このとき、いま考察した自己規定の違いによる自称詞・他称詞あるいは一人称・二人称の問題が浮上する。これは文化のアイデンティティを大きく変容させる問題であることを指摘したが、翻訳の過程で日本の古典、特に物語において同様の変容を余儀なくさせるだろう。「私」「俺」「僕」「こっち」「お父さん」「パパ」「ママ」等の言葉が自称詞として用いられている場合やよくあるように省略されている場合、文脈によって意識が可能であれば別だが、それは「I」または「je」と訳さざるを得ない。すなわち、古典が言語の変更ゆえに、大きな変容を受ける。

途中で簡単に言及した問題に、言語には特有のリズムがあり、それが韻文に顕著に表れる、という事実がある。そして、国語外国語化は当然このリズムの変更を意味するから、リズムと深い関係のある芸能が古典であればその継承が不可能になるだろう。言語のリズムが翻訳不能であるのだから、その範囲の古典芸能の放棄を意味する。

同じ理由で、リズムを伴う伝統芸能は予測できない変容を受け入れざるを得ないだろう。能狂言や歌舞伎・文楽などが言語の代置をいかに克服するか、正直なところ予見不可能である。その大衆性ゆえに広く親しまれた民謡や歌謡曲等の歌の文化にも同じことが言えよう。

さらに、20世紀に映画やテレビとして発達した映像文化も、吹き替えか字幕という形式で翻訳されざるを得ない。小津安二郎や黒沢明監督の日本の名画も日本語で理解できなくなる日がやってくることになる。日本語で制作された映画はすべて同じ運命をたどる。

2003年は日本放送協会テレビ放映50周年記念で、NHKのアーカイブから選りすぐられた作品が再放送された。この年の2月に埼玉県川口市にオープンした「NHKアーカイブス」にはこの時点で既に約59万本の保管素材があるという。これらの作品の翻訳あるいは字幕作成ということを考えるだけで気が遠くなる。

このように、具体的に考えてみると、国語外国語化がいかに多くの困難と不確定さを抱えているかがよく理解される。確かに、匿名空間が増殖しつつある現代社会の中で生きていくために、英語・フランス語式自己規定は日本語にはない柔軟性を持っており、それがより有効に働くだろうと思われる。だが、それは極めて現代的で一時的な問題であり、それを言語選択の基準にすることはやはり性急に過ぎるだろうし、同じ問題に対して日本語が驚異的な処方箋を示す可能性を誰が否定できるだろうか。

そうすると、次のように問わざるを得ない。

我々の祖先をも含めて日本民族全体にとっての大変革を実行しなければならないほど、日本語が不備であり、国語外国語化は日本民族の発展のために不可欠なのか、と。

この問いには、その冒険の不確定さと現在の日本語の状態をよく斟酌する時、我々は否定的にならざるを得ない。

日本人に生まれた運命を引き受け、母語としての日本語を守り磨くことを義務として積極的に自分に課していくことが正当な選択だろう。勿論、個人のレベルで選択の自由を否定するものではないが、日本民族は日本語を継承して発展させていく宿命を負っていると考えて、自ら

の運命を受け入れることが必要なのだ。

日本語の代わりに英語かフランス語を採用して特異な文化を発展させていくことのほうが幸福ではないか、という問いを提出した。しかし、幸福の問題は、特に民族というレベルになると比較が不可能だ。日本民族が日本語を継承していく宿命を負っているという認識に立てば、そこでより幸福になる努力をするより仕方がないのだ。ただ、時代は個人のレベルでの自由を認めるように推移している。個人あるいは家族という単位で、言語や文化の選択がなされる時代になったといえよう。

## 第八章 国語外国語化論の提起する日本語の問題点

この論文の狙いは、国際的人口移動の活発化と通信革命により、社会がおおきく変化しつつある中で教育がその形式や内容を根底から問われる現在、国語外国語化論の再検討を通じて、母語であり教育言語である日本語の問題を炙り出そうとするものだった。森有礼や志賀直哉の論を真剣に検討することは、その命題が先鋭的なだけに、現在の日本語が抱える問題を浮き彫りにしたと思う。

英語第二公用語論に象徴的に見られるように、単に受信的な文化摂取型の英語能力ではなく母語話者に近い英語力の育成の必要性が声高に叫ばれているし、英語を導入する小学校も増えてきたし、中学・高校・大学を通して英語教授法の研究が年々盛んになっている。公的な教育制度以外でも、いわゆる受験勉強用の英語から実践的な英語まで教える英語学校や塾が日本中に雨後の竹の子のように見られる。ラジオ・テレビというマスメディアや流行のインターネットの世界でも、英語習得用のプログラムが盛りだくさんに並んでいる。

小泉内閣で推進されている規制緩和の一つとして、群馬県太田市における「外国語教育特区」があり、小中高一貫校を設立して外国人教諭が英語で授業を行うという。その成果は分からないが、教育言語を英語にしようとするのは、母語話者に近い人材を育成しようとする試みであろう。これは、しっかりと運営されていけば、現在の言語習得に関する理論に照らし合わせて、母語話者に近い人間が育って行くことは確かだ。残る問題は、そのような制度において日本語力がおろそかにされないか、という点である。

教育言語の一部あるいは全部を英語で行い、日本において人工的に生活の中で英語空間を作り出そうとする試みは、他の学校でも行われている。例えば、静岡県にある私立加藤学園がそうである(注1)。このような傾向は、使える英語教育を目指す方針の当然の帰結として、いろいろな学校で試されると思う。そこには、国語を廃して英語を採用するという国策としての提言の持つ過激性は影をひそめているが、実質的に国語を押しつけて英語が強制されていく。

英語熱を証明するのは上のような事実だけではなく、日本にあるインターナショナルスクールの特異な現状がある。インターナショナルスクールの一般的なイメージは、仕事の都合などでやむなく日本に滞在せざるを得ない外国人の子供達のために設立された特別な学校というものだろう。それは、ちょうど、外国における日本人学校の存在と同じように受け取られているのが普通ではないか。それゆえにこれまで、文部科学省はそれらの学校を専門学校として日本の義務教育と同じ扱いをしないでいた。平成16年度の大学入試からその卒業生にも日本の大学の入学試験受験資格が与えられたことから、それらの学校が文部科学省によって日本の正式な教育機関として認定されたことになる。

そのインターナショナルスクールの実態を調べると、驚くことに、両親が日本人で日本の小

中学校に無料で子弟を送り込むことが出来るのに、高額な授業料等を払ってもむしろインターナショナルスクールを選択した日本人の子供が多いのだ。国際結婚から生まれた子供や海外帰国子女で日本の学校に馴染まない子供が入学しないわけではないが、その金銭的な負担を考えると、とてもそのような子供が多いとは思えない。

日本中のインターナショナルスクールの在學生を精査したわけではないが、そこで要求されている納付金の額から、それは一つのビジネスとしても成立していて、平均的な給与所得者が国際結婚をした場合も帰国子女の親であっても子弟を送り込むことが難しい学校であることは容易に理解される。そこは、外資系の会社の経営陣や外交官等の特権階級や、極めて裕福な日本人が、子弟を送り込む学校なのである。高い経費は、多くの場合、幼稚園から高校卒業まで払い続けられることを考えると、地方の人達が東京にある私立大学に子供を送るよりもずっと高くつく。

京都にある「Kyoto International School」は、他の同種の学校と比較して学納金の安いことを強調しているが、それでも幼稚園以降は、年間116万円である(注2)。所沢市に1988年に創立された日本人向けのインターナショナルスクールは、カナダ人によって運営され、小学校から中学・高校までのカリキュラムが用意されている。入学金や施設費は初年度のみで、それぞれ10万5千円、21万円である。中学・高校への進級時には免除される。しかし、授業料は高く、年額157万5千円となっている(注3)。

東京の麻布にある「Nishimachi International School」や、渋谷にある「The British School in Tokyo」などは、年間の学費のみでほぼ200万円になる(注4)。北海道や東北の学校のようにいくつかの例外はあり得る。そこに宗教的な理由が入り込むと、お金の問題をある程度解決することが可能だからだ。しかし、多くの場合は上に示したように、たいへん高価な教育制度なのである。そうすると、日本の小学校・中学校であれば授業料等は無料なのにも拘わらず、このようなインターナショナルスクールに子供を通学させる日本人の親は、国語英語化論を唱えずに実行していると言えまいか。

このような決断をする日本人はその金銭的負担から、裕福な階層に属している。彼等は日本の社会でそれなりの地位を得た人間であろう。教育程度も高いと推測される彼等は、ある意味で日本語を捨てて英語を主言語として子供を教育することを決断したので。

このように英語で教育された子供達は、高等教育機関として英米系の大学を選択して海外に出ていく。平成16年度の大学入試から、国際機関によって認証されたインターナショナルスクールの卒業生にも、日本の大学の受験資格が与えられた。しかし、新聞によると大学入試センター試験を受験したのはわずかに2名である。彼等は日本で生活して家庭では主に日本語を話している、すなわち日本語の環境に身を置いているから、日本語も聴解ができるだろう。しかし、教育言語は英語であるので、精緻な語彙や論理的思考は英語にならざるを得ないだろう。また、親が子供をインターナショナルスクールに入れた時点で、日本の大学は彼等の眼中に無いのだろう。

森や志賀の国語外国語化論が公的な論としては極論であったが、それを実行している日本人がけっして少ないとは言えないほど存在するこの日本の現実を見ると、それはやはり驚嘆に値する。日本の支配階層の中にこれほどまでに日本語や日本の教育に失望している人間がいることは、その原因を突き止めて対策を練らねばならない問題であろうとさえ思う。

ここで確認して置きたいのは日本の英語学習熱のなかで、日本語よりも英語を確実に身に付ける子供達が出てきているということである。そして、この章の始めに挙げた諸事情のために、



このような国語外国語化論を唱えることなく実行している人間がこれから増えて行くだろうと考えて間違いないだろ。

それでは何故、このように日本人であっても日本語よりも英語を基礎言語として子供に与えたいという親が多いのだろうか。志賀が言及した日本語の不完全性のためか。森が上げた英語の国際性のためか。それとも明治以来の欧米に対するコンプレックスのためか。

これらの理由が渾然一体となって、一部の人間達による国語外国語化論の実践という現実を作り出しているのだろう。英語の国際通用性は、公用語・教育言語として母語話者に劣らない力を持った話者（母語話者もどき、と呼ぼう）や母語話者が世界中に満遍なくしかも多く存在し、さらに日本人のようにコミュニケーションのために英語を学校等で学びどうにか話す人間（国際英語話者）が多いという点では、高いと評価することに異議はないだろう。

これは、逆に日本語の国際通用性の低さを浮き彫りにする。英語がこれほどまでに世界中に広まったのは、イギリスの帝国主義下における植民地主義や第1次世界大戦後のアメリカの驚異的な経済発展などの政治経済的要因が大きいと考えられる。志賀直哉が勧めたフランスも世界中に多くの植民地を持ち、そのために世界中に、フランス語の母語話者もどきの人間が多く存在する。そこから、考えると世界で第2の経済大国になった日本語はもっと国際通用性が出てくるのが普通だろう。日本の旧植民地では、日本語が教育言語として通用していたし、今でも年配の韓国人や朝鮮人、台湾人などは日本語を話す人がいる。しかし、日本語の国際通用性は低いと言うのが正確なところだろう。それは何故なのか、と問うことが出来よう。

黒船来襲から、すなわち江戸時代末期の西洋との直接的な接触から、富国強兵・和魂洋才・脱亜入欧を目的として邁進した明治時代や、西欧的デモクラシーが高揚した大正時代を経て、西欧列強の帝国主義的拡大主義に対抗してアジアに領土的野心を持ち、ついにアメリカと戦争に突入して敗れ、そこからアメリカの民主主義と物質的繁栄をモデルに今日の経済大国になった日本、そこに培われた根深い西洋コンプレックスの問題は、多くの論者が論じているが、これが論理という手法で説得・解決することが容易でないこと、集団的なコンプレックスである点でまだ長い治療期間が必要な文化的な神経症とさえいえること、などの理由でこれからの日本の歴史の中で少しずつ解決していかなければならない歴史的な課題なのだ。

最後に残ったのが、日本語の不完全性というこれも明治の初めから何度も議論されてきた問題だ。そのときから現在までの国語改革に対する日本人の努力は並大抵のものではなかった。言語というものは、完成することがない記号体系だろう。なぜならば、言語を必要とする人間社会が変化あるいは発展して行くからだ。その意味で、日本語の不完全性というより、または上で論じたように日本人は日本語の世界に生まれたという宿命を引き受けた以上、欧米語に比較した劣等性という観点からではなく、現在の日本語の問題点という観点から考えてみる。

ここで、二つの問題点を提出してみたいと思う。一つ目はこの論文の中で浮かび上がった現代日本語と第二次世界大戦以前の日本語との間の格差であり、それに由来する日本語における文化継承のある断絶である。二つ目は最近の脳生理学等の分野で明らかになった、日本語を母語とする日本人にとっての英語やフランス語の生理的困難さの論点である。（以下次稿）

（注1）<http://www.katoh-net.ac.jp/> 平成17年9月21日現在

（注2）<http://www.kyoto-is.org/> 平成17年9月21日現在

（注3）<http://www.columbia-ca.co.jp/> 平成17年9月21日現在

（注4）<http://www.nishimachi.ac.jp/>と<http://www.bst.ac.jp/> 平成17年9月21日現在